

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 私^①が犬を飼うようになった動機は、幼い時から犬が遊び相手だったからである。雑種だったと思うが、ジョンという大きな犬が、いつも乳母車の傍で私のお守りをしていた。私がむずかれば、顔をなめてなだめた。あまり泣くと家に走って母に知らせた。大きな犬で近づく者もいなかったから、家では安心してジョンにお守りをさせていた。

私がよちよち歩きを始める頃、ジョンの背によじのぼったり、耳をひっぱったりしても、ジョンはされるままになっていた。ジョンに寄りかかって庭のごさの上で昼寝することもあった。

2 子供の情操教育面で動物を飼うことはいいと思い、私は子供の遊び相手として犬を飼うようになった。その中で最も賢い犬と馬鹿で印象に残る犬のことを書く。

コニーはセッター種で、友人のロシア文学研究者の山下三郎氏が獵犬として使っていた犬である。うちへ連れて来られた時はフィラリアがかなり進んでいて、獵犬として使えなくなっていた。現在はフィラリア（犬の病気）のいい薬があるようだが、当時は適当な治療もなかったのだろう。腹水がたまり、大儀そうであった。まだ五歳で、老犬というほどではなかった。

井の頭公園に隣接した土地に家を新築したばかりだったので、この庭に a にしてゆつくり余生を送らせてやってほしい、というのが山下氏の希望だった。早速かかりつけの獣医さんに往診を依頼すると、

3 「こんな犬をお宅に連れてくるなんて無責任ですな」

と顔を曇らせたが、コニーをバンの後ろにのせて行き、数日後腹水をぬいて貰ったコニーは、馬鹿にスマートになって帰って来た。

5 私は、これまで犬に芸を教えることはしなかったが、コニーは獵犬として実に見事な訓練を受けていた。小学校低学年の娘とすぐ仲良しになり、彼女が友達とゴム跳びをする時、コニーに跳べと、号令すると、自分の背よりも遥かに高いゴム紐を楽々跳んで見せた。

娘がハーモニカを吹くと、傍で首をかしげていて、ウオーオーオー、とそれに合わせて唄うように鳴く。娘がおやつをわけてやり、「待て」をかけている時、友達が呼びに来て遊びに出かけてしまったことがある。コニーはお菓子の前にそのまま座り続け、私が「よし」と言っても、娘が帰ってくるまで待っていた。

散歩の時はびつたりと右横について歩き、よその犬が近づいて来ても見向きもしない。まだその頃は飼主さえ傍にいれば鎖をとき放してもうるさく言われなかったから、玉川上水周辺の広場に放してやると喜んで走り廻り、呼子を吹くと忽ちもどって来た。上水の水は涸れていたが、「跳べ」と言うとかかなり幅のある対岸までジャンプして見せた。

山野を駆け廻り、獵をしていたコニーにとって、放し飼いとはいいながら庭の中しか動き廻れぬ生活は窮屈であつたろう。時折公園の際のフェンスの傍に座って、外を眺めていることがあつた。夫はそれを見て、

6 「兎追いしあの山……」

と思っているのだろうと言った。

フィラリアは薬を与えてもカンチせず、腹水がたまってくる。すると獣医さんが迎えに来る。コニーは獣医さんが指示しなくても自分からバンの後ろに飛び乗った。これに乗れば、又身軽になって帰って来られることを知っているのだった。

コニーは、次第に体力を失っていった。夫は獣医さんに頼んでシェットランド・シープドッグを買い入れた。コニーは雌犬で子犬のリッキーを可愛がり、文字通りなめ廻していた。それでも家人たちの関心が子犬に移るのが淋しかったらしく、娘が子犬を抱き上げると、体あたりするように私に寄りかかって来た。コニーは大きいので抱くということはしたことがなかったが、背を抱えて撫でてやると、満足そうにじっとしていた。

7 子犬が目を悪くして目薬をさしてやるのを見ていたコニーは、私の傍に来て顔を仰向け目薬をさしてくれと言わんばかりに目を見開く。その大きな目に目薬を落してやると、気がすむらしかつた。

何度目かの入院の時、獣医さんはもう駄目だ、と言われた。夫は、娘がコニーの死ぬところを見るとショックを受けるから、苦しまぬように楽にさせてやって下さい、と頼んだ。その時もコニーは、いそいそとバンに乗って行き、そのまま帰って来なかった。

あとになって獣医さんは、子供さんに愛しているものの死を見せることも、教育の一つだと思う、コニーもこの家で死を迎えたかっただろうと言われ、私は自分の無思慮を悔いた。

リッキーが成長して、獣医さんは同種の犬を飼っている家をショウカイして下さった。一時嫁入りしたリッキーは、やがて六匹の子を産んだ。そのうちの一匹が未熟児でいつまでも母犬の乳房に吸いついていた。小さな尖った歯が生えても乳離れしないので、母犬の乳房は傷だらけになり、リッキーは痛がつて子犬を振り放す。

未熟児に生れた子犬を不憫（かわいそう）に思つて、娘はハッピーと名づけた。他の犬は、血統書をつけて希望者に差し上げたが、ハッピーだけはあまりにみすぼらしいので家に置くことにした。

母犬が乳を与えないので、私はパンやごはんを牛乳でやわらかく煮て、掌にのせて食べさせた。獣医さんは、一般的に犬を親子で飼うと、子は母犬につき、飼主にはあまりなつかないのですがね、と言われたが、ハッピーは多分私を親と思い込んだのか、私のあとばかり追ひ、庭掃除をしていても足にからまりついて転んだこともある。

私の書斎は二階にあり、前がベランダになっている。私が仕事をしている間、ずっとガラス戸の傍に座り続け、声をかけてやるのを待っている。抱いてやると、嬉しさに目をうるませ、私の気が変らぬようにじつと化石のように軀を動かさない。階下の居間にいる時は、網戸に前脚をかけて私の注意をひこうとするので、網戸が爪で引き裂かれ、夫は犬を甘やかすな、と文句を言う。

網戸に前脚をかけて、うるんだ目でこちらを見ているハッピーの写真を杉本苑子さん（熱海在住の作家）に送ったら、何種かわからないがゴージャスな猫の写真を送って来た。杉本さんの愛猫ピリポで、いかにも権高な目をしている。

写真に添えられているピリポからの手紙。

ハッピーちゃん

可哀そうにちくちくものを食べていないのね。ごしゅじんさまがケチなんですよ。いわしのシッポか煮干がごちそうなんじゃない。わたしなんか、あけぼのの金線のかにかんばかりで飽きちゃったわ。うちへ来ればおいしい物うんと食べさせて上げるわよ。

ピリポより

ピリポの何たる手紙。しかしハッピーは見れば見るほどみすぼらしい。いかにもエイヨウの悪そうな毛並、憐れつぽい顔……。

それに較べてピリポの貴婦人のような豪華な毛皮、エメラルドのような腫、ハッピーがどんなに懂れても手の届かぬ高嶺の^⑤  なのだ。

私は杉本さん宛の手紙の終りに、

ハッピーが熱海恋しと 鳴く夜かな

と書き添えた。ハッピーは時々悲しげに夜鳴きするのである。

ハッピーが家出したのは、それから間もなくのことだった。門と裏木戸を必ず閉め、庭へはいる境の扉も閉めて放し飼いにしているのだが、植木屋さんが庭木の手入れの際、いちいち木戸を開めるのは厄介だし、つい閉め忘れた隙に脱走したのである。

夫と私とお手伝いさんが三方に散って探したが見つからず、翌日警察と保健所に届けた。どんな犬かと聞かれても、茶色い小型犬と言うだけでは、あまりにもありきたりである。本当は両親ともシェットランド・シープドッグなのだが、とてもそうは見えない。警察にも保健所にも、今のところ届けはないということであつた。

あいつはバカだから、道もわからないんだ、犬は不思議な動があつて、マンションに移ることになった友人が、知人に犬を車で迎えに来て貰ったんだが、何日もかかってもとの飼主のところへもどつてきた話がある、と夫は呆れ果てたように言った。

捕獲された迷犬は、東京の三鷹、武蔵野地区の場合、日野市の動物管理所に送られ、一週間後に処分される、と聞いて、私は祈るような気持ちで日野まで出かけて行つた。

ハッピーのように脱走したとは思えぬ血統正しそうな犬たちの中に、腰がぬけたような恰好でハッピーがうずくまっていた。あの立派な犬たちの飼主は、殆ど迎えに来ぬという話であつた。

（津村節子『似ない者夫婦』〈河出書房新社〉より）

- 問 1 (1) 〰線①「乳母車」の読みをひらがなで書きなさい。
 (2) 〰線②「カンチ」、③「ショウカイ」、④「エイヨウ」を漢字に直しなさい。
 (3) 〰線⑤「高嶺の□」について、□にあてはまる漢字を一字で答えなさい。
 (4) 〰線⑥「三方」について、「方」という字と「数字」を組み合わせて「あらゆる方面」という意味のことばを作ることもできる。解答らんの□□□□のマス目を全部つかってそのことばを答えなさい。

問 2 — 線 1 「私が犬を飼うようになった動機は、幼い時から犬が遊び相手だったからである」とあるが、筆者は、後年、幼い時から犬が子供の遊び相手になることによって、どういった方面で効果があると思ったか。「—」と思った。」ということばに続くように、文中から二十字以内でぬき出し、解答らんにはその最初と最後の三字を答えなさい。

問 3 — 線 2 「最も賢い犬と馬鹿で印象に残る犬」とあるが、「最も賢い犬」のことが記述されているのはどこまでか、その最後の一文の最初の三字をぬき出しなさい。

問 4 □ a □ にあてはまることばを、文中から四字でぬき出しなさい。

問 5 — 線 3 「こんな犬をお宅に連れてくるなんて無責任ですな」というかかりつけの獣医さんのことばについて、「こんな犬」とはどのような状態の犬のことを指しているか、次の空らん①～⑤にあてはまることばをそれぞれ指定の字数(①五字、②六字、③二字、④三字、⑤四字)で文中からぬき出し、一文を完成させなさい。

(①) が (②) いて、そのため (③) が (④) 、 (⑤) な状態の犬。

問 6 — 線 4 「スマート」について、このことばを言いかえた漢字二字のことばを文中からぬき出しなさい。

問 7 — 線 5 「コニーは猟犬として実に見事な訓練を受けていた」について、これを説明すると次のようなことが考えられる。次の空らん①、②にあてはまることばを入れなさい。ただし、①には、五字以内のことばを文中からぬき出し、②には、「主人のいいつけ通りにまじめに務めを果たす様子」を表す漢字二字のことばを、自分で考えて入れなさい。

散歩の時はびつたりと右横について歩き、そして、主人の号令一つで、素晴らしい (①) 力を示すなど、主人の命令に (②) に従う。

問 8 — 線 6 「『兎追いしあの山……』と思っているのだろう」は、「あの山で兎を追っていた昔のことを思っているのだろう」の意と考えられるが、コニーは、昔、兎を追ったりしながら、どのような生活を送っていたと考えられるか、「飼主と—と考えられる。」という解答らんの空らんをうめる形で、文中から十字以上、十五字以内のことばをぬき出しなさい。

問 9 — 線 7 「私の傍に来て顔を仰向け目薬をさしてくれと言わんばかりに目を見開く」というしぐさをした理由として考えられることを、「—から」に続くように、文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問10 — 線8「私は自分の無思慮を悔いた」とあるが、「無思慮」とは、具体的に私のどうした考えのことを指しているが、次の空らん①にあてはまる七字のことばを、「子供にうせなかったこと」という解答らんの空らんをうめる形で、文中からぬき出さない。

夫が獣医さんに頼んだことば通りに、コニーを早く楽にさせてあげようということを認め、子供に（ ① ）せなかったこと。

問11 — 線9「どりぽからの手紙」について、この手紙は杉本苑子さんが、どりぽになり代わって書いた手紙であるということが分かる。この手紙にこめられたどりぽの気持ちを説明した次のア～オから、もっともふさわしいものを記号で答えなさい。

ア ゴージャスな生活を送り、気位の高いどりぽは、他の動物の生活など全く眼中になくただあざけるだけで終わっている。

イ どりぽは自らの容姿と食事について自慢しながら、ハッピーに対して飼主の愛情不足を改めさせるように仕向けている。

ウ 自分の恵まれた生活を自慢し気取ったそぶりのどりぽではあるが、ハッピーのことを気づかう一面も持ち合わせている。

エ 相手を見下したような態度で、すぐれた雌猫であることをほこるどりぽは、ハッピーのみすぼらしさを馬鹿にしている。

オ どりぽのようにぜいたくで恵まれた生活ができるように、ハッピーちゃんも負けずにがんばりなさいとはげましている。

問12 — 線10「杉本さん宛の手紙」について、この手紙を書いているときの筆者の気持ちを説明した次のア～オから、もっともふさわしいものを記号で答えなさい。

ア どりぽとハッピーの容姿には明確な差があるが、磨きをかけ、いつかどりぽのことを見返してやろうと思っている。

イ 裕福で豪華などりぽの生活は確かに素晴らしいけれども、努力次第でいつか自分も実現できるはずだと思っている。

ウ どりぽにはどりぽのハッピーにはハッピーの生き方があり、他者の悪口など全く無視して育てていこうと思っている。

エ どりぽの容姿には到底及ばないハッピーの貧弱さを認めつつ、こちらはこちらで愛情を注いで育てていこうと思っている。

オ どりぽの思い上がった態度には我慢がならないので、いつか熱海に行った日に必ず仕返ししてやろうと思っている。

問13 — 線11「あいつはバカだから」とは最初に出てきた「馬鹿で印象に残る犬」と呼応しているが、筆者は「ハッピー」のどのようなところを取り上げて「馬鹿で印象に残る犬」だと記述したと思われるか、次の空らん①～③にあてはまることばをそれぞれ指定の字数（①五字、②二字、③二字）で文中からぬき出し、一文を完成させなさい。

賢い犬であれば犬特有の（ ① ）を働かせて、何日かかっても飼主のところにもどってくる習性があるはずなのに、（ ② ）または（ ③ ）してしまい、みんなで探してももどってこず、捕獲され、家からずっと離れた動物管理所に収容されていたので。

問14 ———線12「あの立派な犬たちの飼主は、殆ど迎えに来ぬという話であった」という結びの一文について、この一文の背景にあるものを、筆者の考えをくみ取って、次のように説明してみた。次の空らん①～④にあてはまることばをそれぞれ指定の字数（①十字、②八字、③三字、④四字）で文中からぬき出し、文章を完成させなさい（ただし、同じ数字部分には同じことばが入る）。

ここに挙げた「あの立派な犬たち」とは、（ ① ）ということばを受けている。この犬たちはどうやら飼主の元を自分から逃げ去った犬ではなく、飼主から見放された捨て犬のようである。このように立派な犬であっても、飼主の思いやりの無さから、不幸な目にあい、一週間経っても飼主が迎えにこないと、処分される運命が待っている。

これに対して、ハッピーは飼主の元を逃げ去った犬でありながら、家族の人たちが懸命にその行方を求め、筆者も三鷹市から日野市にある動物管理所まで足を運んでいる。その時の筆者は（ ② ）でそこに出かけたという。

そして、ようやく対面できた時のハッピーは「腰が抜けたような恰好」をしていたという。ここには自分のしでかした行為について、申し訳なさそうな様子は見られず、筆者のお迎えに感謝して、嬉しさの余り跳んでくると言った行為もみられず、放心状態であったことが感じ取れる。しかし、「あの立派な犬たち」と違って、この場でハッピーは飼主に命を救われたのである。

ハッピーは（ ③ ）として生まれた子犬であり、それをかわいそうに思った娘さんからその名を授かっている。生まれつき不利な条件を背負いながらも、（ ④ ）になって欲しいという飼主の家族の願いをこめて育てられた犬として、馬鹿ではあっても、飼主のおかげで（ ④ ）な生涯を送ったのではないかと想像される。

二 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、本文は意味段落①～⑤に分けてある）。

①「友人としての本」というふうにして本を考えると、まず考えることは、¹友人とはどういうものかということです。ここでいう友人というのは、友人というあり方のことで、どういうあり方を友人と言い、そしてそうした友人というあり方が、本というもののあり方において、どういう意味をもつのだろうか、ということです。

友人というのはその場がぎりではありません。「ずっとつづく」関係です。親しい、よく知っているという以上に、友人というあり方の **A** をなすのは、「ずっとつづく」ということ。「ずっとつづく」ものが友人であり、友人たりうることであり、「ずっとつづく」というのは、日常的にずっと連続するだけでなく、日常的にたとえ連続していても続いているという感覚がずっとつづいている、ということです。

友人と言うと、人間のようにしか聞こえないかもしれませんが、人間だけでなく、たとえば山もそうです。

そこに山がある。その山を見て、そこにひとは、さまざまなものを見る。緑を見る。晴れたり、曇ったり、天候を見る。過ぎてゆく季節、やってくる季節を見る。山を見ているうちに、自分の思いを見ていることに気づくことも、きこえます。状況、年齢、環境、その日の気分の問題まで含めて、それぞれに、さまざまに、そこにある山を見る。

そうやって山を見ることができるようになるためには、大事なことはただ一つ。そこにその山がずっとある、ということです。ずっとあるのが、山なのです。

²石川啄木が「ふるさとの山に向かひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな」と歌った「山」は、山すなわちふるさとであり、ふるさとすなわち **B** です。そこにずっとある山が、「石をもて追はるる」とくふるさとを出でし」啄木には、^aシエウセイの友人でした。

そこに山がある。そこにずっとつづいてある。そのように、ずっとつづいてあるものこそ、人間の友人同様、自分にとっての友人であるということ。自分にとっての友人といえる、ある確かさをくりだすのは、この、ずっとつづいてそこにあることの意味です。わたしたちが毎日にあつて、いいなと思うこと、しんどいと思うことは、友人と言えるだけのものが、ずっとつづくものが、自分のなかにあるかどうかに関わっています。

②「ずっとある」ということは、どういうことでしょうか。 **C** というのは、毎日毎日つづいてゆく、というだけでは違います。毎日毎日つづいているものを、もう一つ別の側から見させてくれるのが、自分にとっての、ずっとつづいているものである、自分のうちにずっとつづくものをもっているかどうかで、ひとの生き方もまた、やっぱり違ってくる。

目の前に毎日の生活がある。その毎日の生活のもう一つそちら側にずっとつづくもの、自分の心のなかにずっとつづいているものとして、友人が存在する、ということです。

友人というのは、わたしたちをふりかえらせてくれるものです。わたしたちは、ふりかえるときにいろいろなことを思い、あるいは感じます。人生があつという間に過ぎて終わってしまった、ということにならないために、わたしたちはそういうものを必要としています。自分のなかで、もう一つの長くつづくものとしての何かを求める。人間というのは本来、一つのものだけではなく、もう一つのものをつねに必要としているそういう存在である、とわたしは考えています。

本は、非常に古くから、人間のあいだに必要とされてきたメディアです。時代がすすむにつれて必要になったわけでも、活字が発明されたから必要になったわけでもありません。

今日の本のかたちとは違いますが、自分の生活を見つめるもう一つの時間、もう一つの場所、もう一つのずっとつづいてゆくものとして、人間が生きてゆくということの友人という性格をもつ言葉のかたちとして、本というものをひろく考えるなら、ⁱ岩石に引掻かれた文字も、ⁱⁱ竹筒に書き留められた言葉も、ⁱⁱⁱあちこちの古墳から出てくる木片や貝片にのこされている記号も、^{iv}絵のかたちに表現されたものも、一つ一つが、そのときそこに生きていた人びとの生活のかたちや活動のありようを、もう一つの場所、もう一つの地点、もう一つの視点から見させてくれる。そこに、人間が本来、必要としてきた本の位置、本の場所というものがあるのだと思います。

そんなふうに、人間がいつのときも日々必要としてきた、「必要」を種子として、本という文化は育まれてつくりだされてきた、というふうに理解したいと思うのです。

③「どんな人もその気になれば友だちは見つけられる。現実生活に友だちがいない人にも、³唯一友人を準備してくれるものがあるとすれば、それは書籍だ」。幸田露伴はそう言いました。

現実生活の友人はその人が生きているということが前提ですが、本は死んだ人すべてのなかから、自由に自分で、友人を見つけることができる。何千年もの昔に友人を求めることもできる。読むとは、そうした友人と遊ぶということなのです。

ところが、時代が新しくなって、本の世界は誰にも近しいものになったはずなのに、近代になればなるほど、逆に、友人を発見するからは落ちてくるのです。そうして、友人を発見する代わりに、手に入れたのは孤独です。

人びとはどんどん孤独になって、どんどん孤立化するようになります。生活は便利になった。暮らしはゆたかになって、さまざまに進歩し、発見は相次ぎ、あらゆる場面で不都合がすくなくなつて、時間はスピードアップされ、不自由さにくるしめられることがなくなった。なくなつたけれども、代わりにただ一つ、とんでもないものを手に入れた。それが孤立感です。人びとが本を読まない時代に、人びとのあいだに失われるのは友人を見つける能力です。

④現在まで続いてきた本の文化の中で、あるいは本を友人とする人間の生活の中で人間が本の中に見てきたものは、二一世紀の初めに立っているわたしたちが本に求めているようなものだけでは、必ずしもなかったはずで、本を通して、本に書かれていないものを想像するちからを、わたしたちは長い間、本から得てきたのだつたからです。

本という文化が長年かかって培ってきたものは、本に書かれているものを通して、そこに書かれていないものを想像させるからです。今日、わたしたちの社会がぶつかっている問題は、書かれていないものを必要とする考え方をなくしてしまったことに起因している、そのためにとまどっているようにおもわれるのです。

本というのは、とてもおもしろい性質をもっています。本は言葉で書かれています。言葉というのは、日常にあつて特殊なものではありません。誰にも占有できないもので、平等なものは言葉です。言葉は、たとえば楽器とは違います。ピアノの音は、日常のなかにある音とは違います。ピアノの音はピアノという楽器だけがつくりだす音です。ピアノなしにはない音です。音楽という表現をささえてきたのは、日常にない音なのです。

けれども、だれが、どこで、何をしていても、言葉はつねにそこにあります。「おはよう」とか、「そのはずだよ」とか、「いやだ」とか、「雨が降っている」とか、「遠くへゆこう」というふうに、言葉は当たり前のものでして、そこにあります。そのように、どこにでもあるものとしての言葉をつかつてつくりだされてきたのが、本です。文化とよばれるものをふりかえって考えるなら、たいがい日常にないもので何かをつくりだすというのが、人間にとっての文化の歩みをつくつてきたことに気づきます。

本の歴史は違います。言語は、つねに **D** のなかにしかなく、**D** のなかにあることができなくなつてしまえば、言語は消えてなくなつてしまいます。言語がなくなれば、その **E** は途絶えます。ロゼッタ石や死海文書や敦煌の遺跡など、失われた言語の解説が遙か後世のわたしたちの目の前によみがえらせたのは、もはや滅んだ言語とともに生きていた人たちの喜びや悲しみまで含めて、その生活の文化の全体、すなわち失われた日常でした。

たつた一つ遺された文字があれば、その文字に記されていない生活、その人たちの生きた文化、文明といったものまで想像することができるのが文字です。

書かれていないものを想像するちから、表されているものではないものを考えるちからを伝えることができるという本のちからに思いをこらすことなく、本を表現の道具やメディアの媒体にすぎないとしてしまうと、長い歴史をかけて、本がわたしたちのあいだに生みだし、もたらしてきているものが何か、見えなくなつてしまいます。あるいは、そうした見えないものへの想像力に対して、おおよそ傲慢な人間になつてしまいます。

⑤今日、人間がもっているいちばんの危険は、人間が偉いのだと思ひすぎていることかもしれません。伝承によつて、文字によつて、そうして本によつて、私たちに手渡されてきた、ここにあるもののむこう側にある、もうひとつの文化というものの大事さ、人が死んだあとにものこつてゆくもう一つのもの、「ずっとある」ものに対する想像力が、今はなんだかひどく削がれているように思います。

友人としての本というふうに考えるというのは、たくさん時間があつて、たくさん読めたらいい、というようなことではないのです。本は、人間のあり方、人生のつくり方、毎日毎日の過ごし方、そういうところにミツセツに、深く係わってきた。そのような本と自分との係わり方を、自分の日々の、あらためて自覚してみちびくべきではないのだろうか

かということです。

本を開けると、初めに始まりがあり、最後にはおしまいがあります。それが当たり前だというのが本であり、本のそなえる特質です。

TVはどこが始まりで、どこが終わりでしょうか。放送が始まる時が始まりでしょうか。終わりというのは、放送がそれで終わるときが終わりなのでしょうか。自分が見ていようといまいと、TVの時間は先にすすみます。⁵本は違います。自分が進まなければ、本は先にすすみません。本はその本を開いたときが始まりで、閉じたときがおしまいです。始まりがあつて終わりがあるのが、本です。

始まりがあつて終わりがあるというのは、人間の生き方そのものです。生まれてきたときが始まりで、死んだときがおしまいです。そのために、本のありようは、しばしばそのまま人間の一生のありようを指すというふうに感じられてきました。「**F**の最初の一頁¹」⁶という言い方があり、「行間を読む⁶」という言い方があります。「一巻の終わり」と言えば、その一巻が意味するのは**F**です。

(長田弘『読書からはじまる』より)

問1 ―線a「シユウセイ」、―線c「ミツセツ」のカタカナを漢字に直し、―線b「遺された」の読みをひらがなで答えなさい。

問2 ―線1「友人とはどういうものか」とあるが、筆者は友人をどのような存在だと考えているか。もつともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア めったに会うことがないが名前は知っている存在。
- イ 互いに親しみを感じていたが二度と会えない存在。
- ウ つい最近出会ったが、どんな時も一緒にいる存在。
- エ 多くの友人の中のひとりと互いに考えている存在。
- オ いつも共にいなくても、常に親しみを感じる存在。

問3 ―線2「石川啄木」の代表作を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 注文の多い料理店 イ しろばんば ウ 一握の砂 エ 羅生門 オ 夕鶴

問4 **A**に入るのにもつともふさわしい言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 枝 イ 茎 ウ 花 エ 根 オ 葉

問5 **B**に入るのにもつともふさわしい言葉を文中から漢字二字でぬき出さない。

問6 **C**に入るのにもつともふさわしい言葉を文中から六字でぬき出さない(句読点等の記号も一字とする。以下の問いも同じ)。

問7 ―線ⅰ～ⅳが示しているものは、何と共通した性格を持つか。次の説明文の**A**、**B**に入るのにもつともふさわしい言葉を文中から指定の文字数でぬき出し、説明文を完成させなさい。

―線ⅰからⅳのようなものも、遠い昔、そのときそこに生きていた人びとの生活・活動の様子をもう一つの側からかいま見せてくれるという特質を持つ。―線ⅰからⅳのようなものは、その特質から、

A (十五字以上二十字以内)

であると認めることができ、それは**B (一字)**と共通した性格を持つ。

問 8 — 線 3 「唯一友人を準備してくれるものがあるとすれば、それは書籍だ」とあるが、なぜそうと言えるのか。次の説明文の空らんに入るのにふさわしい言葉を文中から四字でぬき出し、説明文を完成させなさい。

書籍によって、(四字)でさえ「友人」になる可能性があると考えられるから。

問 9 D、Eに入るのにふさわしい言葉を④段落からそれぞれ漢字二字でぬき出さない(同じ記号の空らんには同じ言葉が入る。以下の問いも同じ)。

問 10 — 線 4 「傲慢な」とは、どのようなことを指すか。文中から十五字以上二十字以内の言葉をぬき出し、最初と最後の三字をそれぞれ答えなさい。

問 11 — 線 5 「本は違います」とあるが、ここで筆者は、TVと本についてどのように述べているか。もっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 本もTVも、自分の意志で始まりと終わりが決められないという共通点を持つ。
- イ 本は自分の意志で決めなくても先に進んでくれるという点でTVとの違いを持つ。
- ウ 本は自分の意志で始まりと終わりが決められるが、TVはそれを自分で決められないという違いを持つ。
- エ 本もTVも、自分の意志で始まりと終わりが決められるという共通点を持つ。
- オ TVは自分の意志で始まりと終わりが決められるが、本はそれを自分で決められないという違いを持つ。

問 12 — 線 6 「行間を読む」とは、ここではどういうことか。次の説明文の空らんに入るのにふさわしい言葉を④段落から十二字でぬき出し、説明文を完成させなさい。

ここでいう「行間を読む」とは、本の中に(十二字)することが、私たちが生きていく上で、自分とは違う人びとの思いをくみ取ることにつながるということである。

問 13 Fに入るのにもっともふさわしい言葉を文中から漢字二字でぬき出さない。

問 14 次に示すのは本文で示した意味段落の小見出しであるが、③～⑤段落の小見出し「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」に入るのにふさわしいものを後のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 「友人がもつ確かさについて」
- ② 「本の位置、本の場所」
- ③ 「Ⅰ」
- ④ 「Ⅱ」
- ⑤ 「Ⅲ」

- ア 創造力の重要性について
- イ 本と人との共通性
- ウ 特殊な存在としての言葉
- エ 想像力の大切さについて
- オ 時代が進んで無くなったもの

〔以下 余 白〕